れ、ゆんたくに交ざり、常連たちのお宝的暮らしを取材しています。

ゆんたくで在宅復帰支援

別の地区で一人暮らしを送る高齢女性。数年前に膝を手術しました。退院後の自宅療養中、近所の人たちがひんぱんにゆんたくやおすそ分けに訪れていました。女性はお返しにコーヒーを入れて振る舞います。そうするうち、女性宅が近隣住民の集いの場になりました。家の軒下にテーブルとイスが置かれ、毎日のように数人が入れ替わり立ち替わり訪れ、ゆんたくを楽しみます。女性は孤立することもなく、元気を取り戻し、やがてリハビリに通う必要もなくなりました。

「外出が難しい女性のお家をゆんたく場にしたわけです。孤立を防ぎ、健康づくりにも役立ちました。近隣のお友だちは女性を見守る一方で、日中気軽に行ける集いの場を手に入れたのです」（与儀さん）

移動販売のゆんたくや女性宅での集いは、一見すると「ヒマなおじいおばぁが集まってる」だけの日常の一コマです。しかし、お宝を評価する視点からは、これらはサロン、買いもの支援、見守り、介護予防、生活支援、在宅復帰支援などを兼ね備えた、極めて福祉的価値の高い活動です。優しい気遣いから生まれ、楽しさを継続の力とし、予算も報告書も不要、代表者・世話人・参加者の区別もない、100％住民主体の資源なのです。

つながりを切らないサークル

中城村社会福祉協議会の生活支援コーディネーター、儀間由紀美さん（右）と大城美乃さんが、ある地区のグラウンド・ゴルフサークルを訪ねます。活動拠点の公園には、認知機能の低下した人も来ていました。

儀間さんと大城さんが、休憩時のゆんたくに交ざって会話を聞くうち、次のようなことが判明します。

その人が活動日を忘れがちになったとき、仲間たちは「家に閉じこもるようになったらダメ」「声をかけてあげよう」「帰りに家に寄ってみようね」「ゴルフに誘うのはプレー開始の2時間前。それより前だと忘れるよ」などと話し合い、しょっちゅう電話や声がけをするようにしました。公園までの道を迷うようになったときには、仲間の誰かが行き帰りに付き添いました。

このようなサークル活動では、高齢による心身の機能低下で参加が難しくなれば、当事者も仲間も「仕方がない」と、ただ諦めることが多いと思います。でも、ちょっとした配慮でつながりを切らずに済むとしたら、当事者はもちろん、いずれ同じような状況に直面するであろう仲間たちにとっても、とてもうれしく心強いことではないでしょうか。

伝統行事は地域共生の実践

本部町子育て支援課の「子ども支援員」で、2020年度までは地域包括支援センター（町福祉課）所属の生活支援コーディネーターだった牧田健太郎さん。

集落の伝統行事「豊年祭」に関わった経験から、次のように話します。

「伝統を守り継いでいる集落ほど、住民同士のつながりは強く、支え合いが文化として根付いている」

豊年祭は、複雑な神事の式次第に加え、音楽・踊り・武芸などの大がかりな演舞があり、準備と実行にはたいへんな手間と時間を要します。

「おじぃおばぁが若者に武術、踊り、着付けなどを教える。これと言った特技がない人や持病、障害がある人も、裏方として活躍する。普段はひきこもりがちなおじぃが、熱心に武術の指導に来てくれたり、不登校の子どもが踊りの練習には毎日参加したりする」

伝統行事は、住民同士の顔の見える関係づくりと、地域共生の実践の場にもなっていたのです。

同町では「野菜や手料理のおすそ分けはしょっちゅうで、車の乗り合わせも当たり前。いつもと様子が違って具合の悪そうな人がいれば、誰かがすぐ気づいて電話をかけるか、家を訪ねて様子を確かめる。それが普通に行われている」（牧田さん）とのこと。

こうした生活文化の継承や発展を後押しする地域づくり支援は、現コーディネーターの比嘉優希さんにもしっかり受け継がれています。

コザ運動公園の「森の喫茶店」（左手前は沖縄市の第２層生活支援コーディネーター城間清美さん）

「地域のお宝」選集 その2

前頁の名護市、中城村、本部町に続き、沖縄市、浦添市、恩納村、北谷町（順不同）のお宝を見ていきます。

持ち寄り式のモーニング喫茶

沖縄市の「地域包括支援センター西部南」に所属する城間清美さんは、2021年4月に第2層生活支援コーディネーターとして活動を開始。まず取り組んだのは、前任のコーディネーターたちが見つけたお宝の現場に足を運ぶことです。

コザ運動公園のあずまやに毎朝7時半ごろ、60～80歳代の男女10人前後が集まります。それぞれ太極拳やラジオ体操、ウォーキングなどに励んだあと、持ち寄ったコーヒーやトースト、サラダ、果物、お菓子などを分け合って一緒にいただきます。

この公園での朝食会は「森の喫茶店」と呼ばれています。通りかかる人にも「コーヒー飲まないね？」などと呼びかけ、親交を広げています。

常連の一人、87歳の女性は、ウォーキングをしてから喫茶店に来ていました。ところが、脚のケガがもとで歩行がやや不自由に。以前のように長い距離は歩けず、自力で公園に通うのも難しくなりました。そんな彼女に喫茶店仲間が手を差し伸べます。行き帰りをそれぞれ別の人が車に乗せてくれるようになりました。女性はみんなと一緒にゆんたくと朝食を楽しみ、杖を使いながらできる範囲でウォーキングをして、元気を取り戻しています。

ラジオ体操と旧店舗の集い

浦添市の浦西中学校区を担当する「地域包括支援センターゆいまぁる」所属の第2層生活支援コーディネーター大西祐輔さんは、コロナ禍においてスタートしたラジオ体操会を取材しました。

70歳代の女性が自宅前の生活道路で、たった一人でラジオ体操を始めました。あれよあれよという間に、

主に高齢世代の住民が加わるようになり、10人前後の体操会に。

参加者の一部は体操が終わったあと、近くの廃業した食堂店舗に集まり、持ち寄ったお菓子などを分け合ってお茶飲みをします。食堂は、営業していた頃から地域住民の集いの場でした。オーナーは廃業後も、住民が自由にお茶飲みやゆんたくに利用できるよう店舗を開放。内装やイス、テーブルなどの備品も残してくれています。

住民はそこに集うついでに、野菜や手料理をおすそ分けし合ったりもしています。

長く親しまれるお店は、ものを売り買いするだけの場所ではなく、つながりを育む地域の拠点でもあります。

退院後の畑仕事復帰を応援

恩納村の地域包括支援センター（村福祉課高齢者福祉係）に所属する生活支援コーディネーター大黒志保さんは、高齢でも畑を続ける人が多い同村で「畑仕事は暮らしに根ざした介護予防」と評価。公設民営の産直市場への野菜などの出荷をサポートするとともに、地区ごとにある青果物の集荷場を「集いと見守りの場」と位置付けます。さらに大黒さんは、より意欲的に畑仕事に取り組んでもらおうと地場野菜のブランド化支援も行っています。

産直市場に野菜類を出荷する、ある地区の85歳女性は、膝の手術を受け要介護状態となって退院しました。入院から自宅療養の期間中、畑が荒れないよう産直仲間の93歳女性が、自主的に畑の管理を肩代わり。さらに産直出荷も本人名義で代行し、85歳女性が収入を得られるよう支えています。仲間の気遣いに励まされた85歳女性は、長靴を履いて電動カートで畑の見回りに出かけるなど、少しずつ外に出てはるさぁー復帰を目指しています。

「村の畑では野菜だけでなく、元気と支え合いも育つんですよ」（大黒さん）

認知症でも仲間とともに

北谷町社会福祉協議会の生活支援コーディネーター、源河裕子さんがお宝探しを本格化させたのは2018年12月。その最初の頃に見つけたお宝の一つに、海岸沿いの遊歩道での体操会「宮城海岸ぷからさの会」があります。

朝6時半からラジオ体操のほか笑いヨガ、口腔体操などを行うもので、体操の前後、参加者がベンチに腰を降ろしてゆんたくに興じたり、終わったあと一緒に食事や喫茶に出かけたりする姿が見られます。参加者は高齢世代が中心で、多いときは30人前後、夏休み中の小学生が加わり40人ほどになることも（表紙写真）。

会には、認知症を患う86歳の女性が2015年頃から夫と2人で通っています。女性は一時、心身の状態がとても不安定で、夫婦で自宅にひきこもる日々を送りました。それ以前にグラウンド・ゴルフで親しくなっていた友人3人が心配して家を訪ね、荒れていた庭や室内の片付けを手伝い、「一緒にラジオ体操でもしませんか」と誘います。認知症でも受け入れてもらえると知った夫婦は、ぷからさの会に積極的に参加。周囲とのつながりを回復するにつれ女性の状態は改善し、抗認知症薬を服用しつつ日常生活にほぼ支障がないまでになりました。

女性が膝の手術を受け、入院と自宅療養を余儀なくされた1か月あまりの間、友人たちが毎日のように家に遊びに来てくれました。コロナ禍で会の活動が一時休止したときは、代わりにウォーキングを始め、路上で行き会う友人たちと交流。また、買いものなどで家の前を通りかかるときには「おーい、何してますかー」と声をかけ合いました。コロナ禍でも膝の手術でも、女性は認知機能の低下がなく、元気を保つことができています。

◇　◇　◇

7市町村の生活支援コーディネーター8人が見つけたお宝のごく一部を、かいつまんで紹介しました。

短い記述ではありますが、地域のつながりと集いの場の多様性、住民が持つ支え合いの力を感じ取ってもらえると思います。

こうしたお宝をどう発見するのか、そのためにコーディネーターは地域とどう関わるべきか、そして誰もが自分らしいお宝を持てる（一人ひとりがナチュラルな資源を自発的に開発できる）ようにするにはどんな働きかけをすればいいのか、さらには、お宝を個別支援や地域づくり支援、協議体運営に生かす方策など、このあとの頁で解説していきます。

地域に入る、お宝を探す「作法」と「実践」

サロンがない日は何してる？

介護・福祉の資源3分類（5、6頁）のうち、生活支援コーディネーターが特に深く関与するのは、ナチュラルとインフォーマルの部分。2つとも「地域」に存在します。住民の暮らしの場としての地域、お宝的つながりと支え合いが営まれる地域、自治会や老人会、各種の住民グループ、企業・団体の活動フィールドとしての地域です。

生活支援コーディネーターは「地域に入る」「住民と関わる」ことで、この2つの資源を把握します。

インフォーマル資源についての情報収集は、一般的な地域アセスメントで十分でしょう。たとえば地区の集会所や公民館で運営される介護予防サロンは、一定の公共性があり年齢などの参加要件を満たせば誰でも参加でき、情報は地域で公開周知されるので、発見は難しくありません。

一方、ナチュラルな資源の多くは、住民同士の親密な関係性のなかでのプライベートな営みです。「地域づくりの木」（5頁）に照らせば土の中の根で、その姿に接するのは簡単ではありません。

近所に具合の悪い人がいれば、すぐ気づいて声をかけたり、手料理を差し入れたり、車に乗せて診療所に連れて行くなどは、親しい間柄だからこそ。私たちは、親しい相手にはあまり負担感やためらいを感じずに手助けができます。逆に言えば、見知らぬ人、嫌いな相手と自発的、積極的に支え合うのは心理的な抵抗感、負担感が大きいものです。

ナチュラルを理解する鍵は、この「親密さ」にあります。

介護予防サロンに一緒に来て、終わったら誰かの家か、公園や近所のお店などでゆんたくするおばぁたちがいます。サロンはインフォーマルな資源、家などでのゆんたく（とそれが可能な関係性）は、ナチュラルな資源です。

名護市の生活支援コーディネーター与儀朗子さん（7頁）は、地区のサロンやミニデイに出かけては、参加者に「これが終わったらどんなふうに過ごしますか」「サロンがない日は何をしますか」と尋ねます。畑に行く、お店で買いものをする、家でゆんたくするといった答えがあれば、「私も行ってみたい。ご一緒していいですか」と頼み、了解を得て家や畑について行ったり、相手の都合に合わせて後日訪問したりします。

北谷町の源河裕子さん（10頁）は、ラジオ体操やグラウンド・ゴルフなど、高齢者が集まる場所があれば出かけて行き、活動に交ぜてもらいます。自治会が地域食堂を開けば食事づくりを手伝い、配食をすれば配り歩くのに同行。高齢でも元気なおじぃおばぁを自治会長や地区の民生・児童委員、ボランティアグループのメンバーらに紹介してもらい、話を聞きに行くこともあります。

本部町の比嘉優希さん（8頁）は、地区公民館で行事予定を尋ね、時間の許す限り参加します。清掃や草刈りなども、取材するだけでなく住民と一緒に汗を流します。海岸に大量漂着した軽石の撤去作業に加わったことも。

このほか、7～10頁に登場する生活支援コーディネーターは皆同じような方法で住民と信頼関係を結び、ナチュラルな資源（＝お宝）にたどり着いています。お宝の当事者らからまた別のお宝情報を得て、次々発見していくようなことも珍しくありません。

お宝当事者の自宅でトーカチの祝宴に加わる北谷町の生活支援コーディネーター源河裕子さん（左から2人目）
※写真提供：北谷町社会福祉協議会

地区公民館の活動が盛んな場合は、まず公民館長（区長、自治会長）や職員（書記）との関係を築き、公民館活動を手がかりにお宝探しの網を広げていくということもしています。

上司、同僚、行政は理解を

北谷町の源河さんは、コーディネーター着任初年度、地区公民館を中心としたインフォーマル資源の調査を行い、冊子「北谷町みつばちてちょう（暮らしの便利帳）」としてまとめ、住民に配布しています（PDFデータを町ウェブサイトからダウンロード可）。調査・取材の過程で各地区の自治会長をはじめ民生・児童委員、ボランティアらとつながり、その後の情報収集やお宝探しをしやすくしました。

同様の取り組みは恩納村の大黒志保さんや、名護市でも与儀さんをはじめとする第1、2層コーディネーターらが共同で行っています。

お宝とは、信頼と親密さのあるつながりで、それが何らかの行動・行為として表現されると、おすそ分けや車の乗り合わせ、さりげない見守り、ちょっとした手助けになります。舞台となるのは自宅、お店、畑、野菜の集荷場、公園のベンチなどさまざま。いずれにせよプライベートな営みであることが多く、お店や公園といったオープンな場所でも、集う人たちの関係はクローズなものです。そこにアプローチする際、誰かに紹介を頼むにしても、飛び込みで「こんにちは。楽しそうですね、何をなさってるんですか」などと声を掛けるにしても、上手に関係を築いていくコツが、いくつかあるようです。

地区の集いと見守りの場になっている青果物の集荷場で、高齢でも畑仕事を続ける人たちに話を聞く恩納村の生活支援コーディネーター大黒志保さん(中央)

名護市の与儀さんが見つけた、一人暮らしの高齢女性宅のゆんたく場（8頁）のようなところに、生活支援コーディネーターが初めてお邪魔するとします。誰かの仲介があろうとなかろうと、調査・取材の前段階として、まずそのゆんたく場に交ぜてもらわなければなりません。

親密な人たちだけのプライベートな集まりに、不慣れでぶしつけな新参者として、おずおずと入って行くわけです。小さな集まりにもその場特有の雰囲気や秩序があります。それを知らずに入り込むわけですから、最初はぎこちなく、気まずさがあるかもしれません。一度ならず二度三度と出かけて、徐々にその場になじみ、ようやく本当の意味で交ぜてもらえます。

相手の暮らしぶりを教えてもらう一方で、こちらの身元もプライベートな部分を含め、ある程度開示する必要があります。でないと、相手も自分のプライベートな情報を明かしません。また、出された飲みもの食べものは、ありがたくいただくことが、信頼関係を結ぶ秘けつです。

北谷町社協には、源河さん宛にしばしば「天ぷらできたよー。取りに来なさい」といった電話が住民から掛かってきます。源河さんは都合が許す範囲でおすそ分けにあずかります。信頼関係を保つ配慮もありますが、おすそ分けが相談を持ちかける口実だったりもするからです。

お宝の現場で当事者と接するときは、相手のほうが立場が上という認識と、謙虚な姿勢が肝要です。高齢でも元気に暮らすおじぃおばぁこそ、地域づくりの方向性を指し示す偉大な「先生」（6頁参照）。こちらは教えてもらう側です。支援する・指導するといった、上から目線の押しつけがましい態度で接すれば、信頼を醸成できず、地域づくりに生かすべき貴重な資源へのアクセスを失うかもしれません。

探し出したお宝のいくつかは、長期継続的に関わるといいでしょう。源河さんは「宮城海岸ぷからさの会」（10頁）とその常連参加者に3年以上寄り添い続け、誰かがケガや病気で活動に参加できないとき仲間同士でどんな支え合いが行われたかや、コロナ禍でも孤立しない工夫などを知ることができました。お宝についての深い認識は、住民や専門職、行政の事業担当らと共有することで、地域づくりを話し合う際の「土台」となります。

地域に入り、住民と関わる生活支援コーディネーターの業務のあり方は、ほかの専門職とは少々異なります。所属組織の上司や同僚、行政の事業担当らが、それを理解することがとてもたいせつです。

お宝を生かす 介護の専門職らとの連携 その1

パーマ屋さんは地域の拠点

地域包括ケアの目標は「誰もができるだけ長く住み慣れた地域・自宅で自分らしく暮らす」。その手段として介護、福祉、保健、医療その他の専門職・機関（フォーマル資源）の連携があり、それらと地域や住民の力（インフォーマル資源、ナチュラル資源＝お宝）の協働を図るのが生活支援体制整備事業だと言えます。

たとえば――〈介護予防プランやケアプランを作成する立場の専門職が、〈担当している介護サービス利用者に提供できる限りの在宅サービス（通所、訪問、宿泊など）をそろえてもなお、埋められないすき間をなんとかしたい〉、あるいは〈過剰なサービスによって利用者が元々持つ地域の人間関係から疎外され、孤立、虚弱に陥るのを防ぎたい〉――そのためにインフォーマルやナチュラルの集いの場を活用するとします。

このとき、利用者がどんなつながりや生活習慣・文化のなかで暮らしてきたかを一切かえりみず、単に近所の資源だという理由でなじみのない小さな「ゆんたく場」（ナチュラル）に押し込もうものなら、利用者もそこに集う人たちも戸惑うばかり。

地区公民館などのサロン（インフォーマル）ならどうでしょう。もしそこに一人の顔なじみもおらず、体操やゲームにもついて行けないとしたら「居場所」とは感じられず、通う気が失せるのではないでしょうか。

仮にその利用者を「日中独居状態の85歳のおばぁ」とします。おばぁはデイサービスを利用、ヘルパーにも来てもらってもいますが、日中家で完全に一人きりになる日が週3～4日あります。

長年おばぁと仲良しだった同世代の女性は、地域のゆんたく場になっているパーマ屋で毎日のようにコーヒータイムをしています。おばぁもかつてはその常連でしたが、歩行がやや不自由になり、若干の認知機能の低下もあって、パーマ屋に行かなくなりました。仲良しの女性は、電話をしたり家を訪ねたりしていましたが、おばぁがデイ通いで留守にすることが増え、家にいてもヘルパーが来たりするので訪問は控えるようになり、付き合いが途絶えつつありました。

生活支援コーディネーターは、十数人の女性たちが入れ替わり立ち替わりゆんたくに来るパーマ屋を「お宝」と位置付け、よく出入りしていました。おばぁのことを店主と仲良し女性から聞き、地域包括支援センター（以下、包括）の担当ケアマネジャーをパーマ屋に連れて行きます。ケアマネとコーディネーターは常連たちに事情を説明、その場で「おばぁのつながりを切らない作戦会議」を開きます。

小さな実践を大きな流れに

常連の一人、76歳の女性は車を持ち、移動手段のないゆんたく仲間の買いものやパーマ屋通いを手伝っています。おばぁとは特に親しいわけではありませんが、「デイに行かない日は私がここに連れて来てあげる。ほかの人も乗せてるから別に構わないよ。今度誘ってみようね」と送迎を引き受けることに。

おばぁと仲良しの女性は週1回、

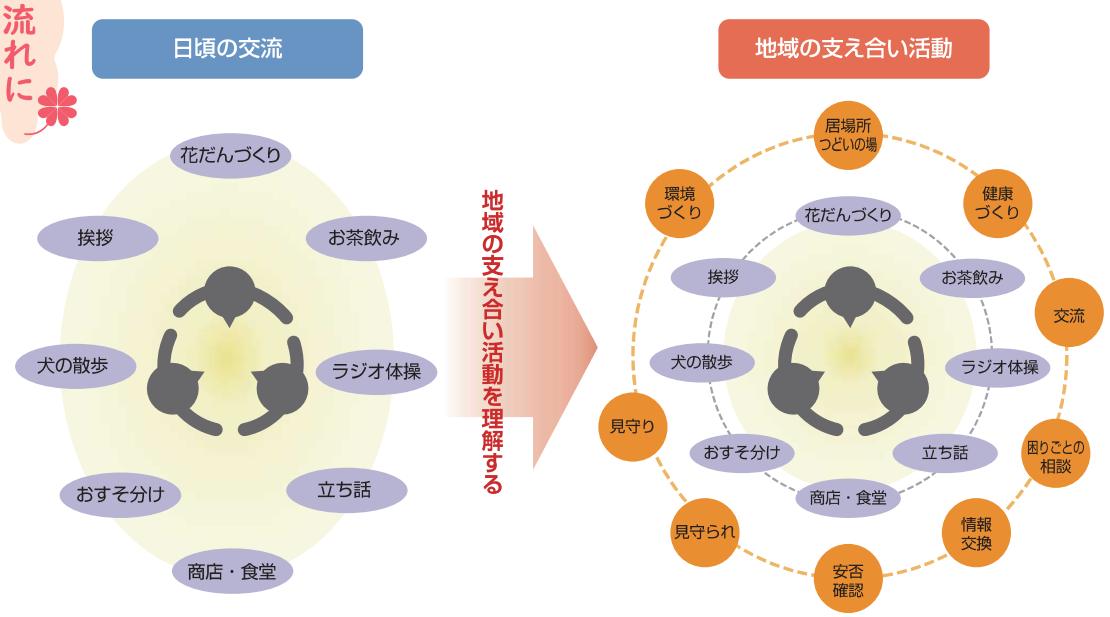

図6 暮らしのなかにお宝としてのつながりや活動がある

住民の『素の姿』を知る

名護市久志・三共地区地域型包括支援センター 二見の里 センター長 山川広美さん

名護市の「久志・三共地区地域型包括支援センター二見の里」では、第2層生活支援コーディネーター与儀朗子さん(7頁)と他の職員とで随時お宝情報が共有され、介護サービスの利用者が関係するお宝があれば、与儀さんと担当職員が一緒に現場を訪れることも。その狙いや効果を、センター長で主任ケアマネジャーの山川広美さんに聞きました。

山川広美さん(左)と与儀朗子さん

「与儀と他の専門職とでは、住民との関わり方が違います。地域で暮らす住民の普段の様子、素の姿に接することができるのが第2層生活支援コーディネーター。サービス提供が前提のケアマネジャーやプランナーは、関わる範囲も見える部分も限られます。一方コーディネーターは、サービスを前提とせずに関わり、その人の暮らしぶりを広く多角的に捉えます」

「サービス利用者が持つ地域のつながりを与儀が把握し、与儀を通じて私たちも知る。利用者の持つ地域リソース(お宝)が、見守りや孤立防止、介護予防に役立っているなら、それをプランに生かしてサービスの過剰提供を防ぐわけです。いい意味で利用者を放っておけます(笑)。サービスを入れることで結果的に本人が持つ、在宅で暮らし続ける力を弱めてしまうことがありますから」

「お宝を介護予防プランなどに生かすには、専門職がお宝の価値や意義を認識していないといけません。そのために、圏域のケアマネが集まる定例ミーティング(2か月に1回)で、コーディネーターがお宝紹介をすることもあります」

「お宝を知り、コーディネーターの役割や動きも理解したうえで、その活用や連携のあり方をそれぞれの専門職が考えるようになればいいと思います」

地区公民館のサロンに通っています。女性はこう言いました。「おばぁはサロンが嫌いだけど、私と一緒なら行くと思う。体操したくないなら私とゆんたくしてればいいさ。サロンは送り迎えがあるし、移動販売も来るから買いものもできるよ」

包括のケアマネは、月に一度はパーマ屋に顔を出し、おばぁのデイの日、ヘルパーが来る日時などをカレンダーに書き入れます。また、おばぁのデイの日を公民館サロンと重ならないよう調整。さらに店主とゆんたく仲間には「困ったことがあればいつでも私に連絡して」と名刺を渡します。おばぁがパーマ屋で過ごすことに仲間たちが不安を感じずに済むように。そして、おばぁだけでなく地区の高齢者に何か異変があったときは、すぐ包括につながるように。

パーマ屋には地区の高齢者の情報が集まり、店主と仲間たちは気になる状態の人がいれば、さりげなく見守っていたのです(**図6**参照)。

店を中心とする地域のつながり(ナチュラル)と、包括のケアマネ(フォーマル)との連絡体制が築かれます。といっても、店主と仲間たちは今までどおりゆんたくを楽しみ、気になる人には声をかけ、必要に応じて包括に気軽に相談するだけ。負担感はゼロ。むしろ暮らしに安心感がもたらされました。

おばぁはパーマ屋とサロンに週1回ずつ通います。家にいる時間帯を見計らって仲良しが家に遊びに来るようにもなりました。おばぁは表情が明るくなり、認知機能の低下も抑えられているようです。同居の息子も喜び、たまにサロンとパーマ屋にお茶菓子などを差し入れます。

生活支援コーディネーターは、関係者の了解を得て一連の経過を情報紙などで発信。おばぁは見守られ、支えられるだけでなくフォーマル・インフォーマル・ナチュラルの3資源の連携と調和のメリットを身をもって示す「先生」になりました――。

このストーリーは、実際にあった複数の事例から構成しています。そして、恩納村の大黒志保さんや北谷町の源河裕子さん、名護市の与儀朗子さん(7～10頁)らは、すでに同様の取り組みを進めています。他の専門職と連携し、小さな地域ケア会議(おばぁの作戦会議)を開き、広報紙などでお宝情報の発信・共有を行っています。

一人の高齢者を巡るつながりと支え合いは小さな出来事でも、広く知ってもらう(見える化する)ことで、地域づくりへ関心を多くの人に引き起こせるのです。この見える化については次頁でさらに解説します。

お宝を生かす「見える化」の重要性 その2

見えないものに光を当てる

住民への「地域づくり」の働きかけが強ければ強いほど、何らかの活動が実現しても「行政（あるいは社協その他）がやれと言うから、やった」となりがちです。生活支援体制整備事業が始まる前から、インフォーマル資源にはこうした「やらされ」型がしばしば見受けられました。支援者が手を引き、助成金がなくなれば、たちまち活動がしぼむことも。

本部町の前生活支援コーディネーター（現子ども支援員）牧田健太郎さん（8頁）が、後任の比嘉優希さん（同）に伝えた地域づくり支援のコツの一つに「やってください、お願いしますと頼む姿勢はダメ」があります。「お願い」で高齢者サロンなどがスタートしても、運営面で住民の主体性が確立されず、短命の「打ち上げ花火」（牧田さん）で終わることが案外多いのです。

同町では子ども食堂や地域食堂の活動が盛んで、牧田さんが立ち上げを支援したものもあります。もちろん「お願い」式ではなく、広報紙「もとぶつなぐまちづくりだより」（A4判カラー片面、月1回程度発行）での先行事例の紹介や、オープンスペース形式の「協議体」に実践者を招き意見交換会を開くといった、情報の発信・共有で「興味を起こさせる」「関心を持つ人の背中を押す」という自発性に訴える手法を取っています。

ナチュラルな資源（お宝）を守る、増やす、受け継ぐ支援についても、同様の手法が最適です。お宝の「見える化」で興味関心や共感を引き起すのです。

地域づくりの木（5頁）の「根」に当たるお宝は、専門職に見えにくいだけでなく、実は当事者の住民にとっても、あまりに身近で日常的過ぎて、その価値を意識しづらいのです。見えない、意識できないままでは、積極的に守り継ぐことはできません。光を当て、見える化・意識化することが重要です。

見える化に関する北谷町の生活支援コーディネーター源河裕子さん（10頁）と町の事業担当者との話し合いの流れは、以下のようなものでした。

▽「お宝を持っている人は、少しくらい介護が必要な状態になっても、地域で自分らしく暮らし続ける可能性を広げられる」▽「では、誰もがお宝を持てるようにするには、どうすればいい」▽「お宝とは何か、なぜお宝として価値があるのか、知ってもらわないといけない」▽「実際に見てもらうのが一番わかりやすい」▽「見て知ってお宝っていいねと、みんなで認める。共感や憧れがお宝を生み出したり、大事に守っていく動機になる」▽「町としてお宝認定証を発行し、大々的に授与式を開こう」▽「お宝広報誌を発行して全戸配布しよう」▽「協議体でお宝情報を共有し、新たな情報も集めよう」――。

広報誌は「いちまでぃんちゃたんうてぃ」（いつまでも北谷で）と題したA4版カラー8頁で2020年10月に発行、全戸配布しました。認定証授与式は同年1月29日開催、住民など100人近くが参加しています。

授与式や記事に登場したお宝当事者には、友人知人や親類縁者から続々とメッセージが届きました。驚きと祝福、それに「私も見習わないといけないね」といった共感を示す声も多数。音信が途絶えていた人とのつながりが復活し

本部町の生活支援コーディネーターが発行する「もとぶつなぐまちづくりだより」（第53号、2021年7月発行）▶

◀▼北谷町のお宝広報誌「いちまでぃんちゃたんうてぃ」（表紙）と、お宝認定証授与式（2020年1月29日）